慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	雑誌『東洋史研究』の發刊
Sub Title	
Author	杉本, 忠(Sugimoto, Tadashi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1936
Jtitle	史学 Vol.14, No.4 (1936. 3) ,p.169(707)- 170(708)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19360300-0170

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

解釋がとられてゐる。されどこれは明かに異論の餘地があり、フランス革命の民主々義的原則とナポレオンの專制政治との相違を明かにせるオーラールの所說とも一致しない。

要ずるにフランス革命史專門の研究書としては右の不滿を禁じ得ないが、要領よく概括せられた近世歐洲政治史として一貫せる見地から述べられてゐるところに本書の價値が存するものと信ずる。本文四百二十頁、詳細な索引が附せられてゐるが、參考書目に出版年代の併記せられてゐないこと、問題の性質によるが前半殊に伏字多くして文義不通の箇所多きは一般向の參考書としてやゝ不適當なるをおそれるが、一般政治史、特にフランス革命史の研究方法の上に與へる示唆は決して少くない力作として推賞すべき好著である。（平山榮一）

西洋史研究第八輯（マキヤヴェリ號）

東北帝大の西洋史研究會は昭和十年度後期の事業としてマキヤヴェリの研究及び紹介を試みた。卷頭に大類伸氏の「マキヤヴェリと時代」があり、次で金倉英一氏が「Virtù に現れたるマキヤヴェリの國家思想」なる研究論文をのせられ、更に平塚、村岡、森脇、石井、宮崎、齋藤の諸氏がマキヤヴェリの「君主論」、「羅馬史論」、「戰術論」、「フロレンス史」、「書簡」等に關し、それぞれ懇切丁寧なる解說を試み、また祇園寺、萩中、村岡の三氏がマキヤヴェリに關する近世史家の研究を紹介されてゐる。卷末のマキヤヴェリ研究文獻（金倉氏）年表（照井氏）と相俟つて完全な一つの研究書にまとめられてゐることは誠に喜ばしい。ルネサンスの研究に缺くべからざるマキヤヴェリの知識を斯うした便利な姿で與へられると云ふことは西洋史研究者にとつて決して小さな喜びでは無い。昨年度西洋史學界に於て特に記憶せらるべき事業の一つであつたと言ふべきであらう。（近山金次）

雜誌『東洋史研究』の發刊

京都帝國大學文學部東洋史學科の卒業生を以て組織する東洋史研究會により、昨年十月創刊せられた「東洋史研究」は、その隔月刊行の豫定通り、十二月には前號にも增し充實した第二號を刊行せられたことを、先づ慶びたい。

東洋學・支那學の專門書は以前から存在したが、東洋史學の專門誌は本誌が最初であり、誇るべき古い傳統を背後に、新進氣鋭の二十數氏の結束は、必ずや斯界に淸新の氣を齎すものと期待してやまない。

その內容目次は

創刊號

晉・趙の北方進展と山川の祭祀　森鹿三

漢代大私有地に於ける小作者と奴隸の問題　宇都宮淸吉

最近五十年支那學界の回顧（アンリ・マスペロ）內藤戊申譯

聖成吉思汗の家譜　山本守譯

第二號

漢代蒼頭考　宇都宮淸吉

天命建元の年次に就いて（滿文老檔の一考察）　三田村泰助
聖成吉思汗の家譜　山本守譯

であるが、本誌の特徴はその頁數の半を割いた批評・紹介、學界展望、近刊叢欄、彙報及び附錄等であり、その詳細なる近刊叢欄は禹域の諸誌をも網羅して甚だ便利な文獻目錄となつてゐる。文獻目錄・索引・引得等の盛に刊行せられるのは、日華を通じて最近の斯界に於ける顯著な傾向であり、過去の整理と未來の發展への導標を意味するものとして、大いに歡迎すべきことであるが、本誌の抱負や立場も又そこにあるやうであり、第二號の編輯後記には、東洋史學の整理と淸掃を以て本誌の使命とされてゐる。

最後に筆者の感想と希望を述べれば、頁數の關係からとは云へ、あまりに論文飜譯の分割掲載の多いことである。もとより多數の同人諸氏の勞作を擁して、なるべく多くを發展せられんとする爲には、止むを得ないことではあらうが、將來時には一人一作きりとなつても、充實した論文を一時に掲載する位の勇氣を持つて戴きたいと思ふ。講談社式の連載主義として非難するわけではないが、一册一册が優れた獨立のパンフレットとなり、それに珠玉の如く雜錄の附屬してゐるなどと云ふのも、淸新な一形式ではあるまいか。何れにしても筆者は本誌の多幸なる發展を祈つてやまない。（杉本忠）

支那青銅器時代に就いての所見

（梅原末治）

（「歐米蒐儲支那古銅精華」別册）

「史學」紙上に於て道野鶴松氏と支那に於ける純銅器時代の存否に就て論戰せられた著者は更に氏が日頃の研鑽により到達した通說と異なる其の意見を概括して本篇を記述せられたのである。著者は先づ青銅器時代を定義し、人類が初め利器として石器を用ひ、後偶然の機緣で純銅の存在を知り、更にそれに錫を加へることにより青銅なる合金を生むことを知つて之で利器を作つた文化の時期を指すものと云ひ、從來の論者が銅製の容器をもつて青銅器時代の存在を立證せんとする傾向を疑ひ、他の地方の例によると青銅の容器は後期の青銅器全盛時代か又は鐵利器出現時代に發現したりと論じ、支那の場合其等の點を考慮せず、單に青銅製であると云ふのみで青銅器時代を特徴づける遺物とするのは否なりとし、支那古代の銅利器の最も特色ある戈と戚との推移を尋ね、戈の中著しく裝飾化されて一種の明器となつたものが殷墟に發見せられるが之は實用的な同種の利器から發達して來た後期のものであり、殷墟は世人の考ふる如く石金過渡期に非ずして遙かに進んだ段階に屬すると見るべきであり、また戚に於ても矢張り裝飾化したものが殷墟に多く發見されることを述べ、かゝる裝飾は同時に所謂三代の尊彝にも表はれたものであり、殷墟出土の雕牙骨片の上の模樣とも合致することが多い。從つてかゝる裝飾的利器の出現は尊彝や彫牙骨片と並行してゐたと考へられると論じ、飜つて尊彝の方を見ると最も嚴肅な形をして繁褥な裝飾を附した非現實的なものが形式の上から最初に位置し、それから漸次器形、圖文共に輕快化する傾向を取つたと見られる。また銘辭の方も普通殷文字と云はれる記號的なものや象形の文字が嚴肅にして繁褥